

第2回 第3次芦屋市地域福祉計画策定委員会 会議録

日 時	平成28年5月20日（金） 14：00～15：55		
会 場	消防庁舎3階 多目的ホール		
出席者	会 長 牧里 每治 委 員 佐瀬 美恵子, 竹迫 留利子, 西村 京, 杉田 俱子, 安宅 桂子, 今川 裕子, 荻野 勝己, 大永 順一, 柴沼 元, 村岡 由美子, 橋野 浩美, 山内 祥弘, 針山 大輔, 脇 朋美, 園田 伊都子, 寺本 慎児 欠 席 長澤 豊 委員以外 エフプラン研究所 原田 仁 事務局 芦屋市福祉部地域福祉課 細井 洋海, 浅野 理恵子, 吉川 里香, 頭井 智世, 片岡 睦美 関係課 芦屋市企画部総合政策担当 鳥越 雅也 芦屋市福祉部高齢介護課 宮本 雅代		
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公 開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開 <非公開・部分公開とした場合の理由>		
傍聴者数	0人		

1 開会

【委員会の成立について】

- ・18人中17人の委員の出席により成立

【委員会の傍聴について】

- ・希望者なし

2 委員長あいさつ

(牧里委員長)

関西で広がりを見せている「こども食堂」ですが、これにはいくつかの意味が込められていると感じています。ひとつはシングルマザーなどの家庭の事情で親が過酷な条件で働いているため、子どものことが後回しになってしまい、食事を満足に取れなかったり、学校に行けなくなったりするという問題が生じている家庭に対する支援ということで、週に1～2度、きちんとした食事を提供する中で、埋もれがちな子どもを発見し、支援につなぐ役割を担っています。これは家庭の在り方が変化し、家族に代わるものが求められるようになり、現れた形ではないかと思っています。

もうひとつは、上手な生き方や助け合いの方法です。こども食堂ではこどもは基本的に無料で大人でさえ、一食300円程度です。この安さが成り立っているのは商店街の人な

どに消費期限前の食材を寄附してもらっているためです。景気の実感はあまり良くなくても、持っているストックをうまく活用することで多様な助け合いができることを教えられました。

紋切り型の地域福祉ではなく、多様な方法で地域社会を再構築していかなければいけないという問題提起として受け止めたいと思っています。

みなさんはどのようにお感じですか。日々思っていることやアイデアを出してほしいと思います。時間をかけて検討しないといけないものもあり、すぐに事業になるかどうかはわかりませんが、積極的にご意見をいただきたいと思っています。

3 議事

- (1) 市民意識調査の速報について
- (2) 検討部会の設置
- (3) 報告事項
- (4) 今後のスケジュール
- (5) その他

4 資料

事前配布資料

- 地域福祉市民会議報告書
- 地域福祉に関する市民意識調査の結果（速報）
- 年齢・性別集計表

当日配布資料

- 第2回第3次芦屋市地域福祉計画策定委員会次第
- 芦屋市地域福祉計画策定委員会設置要綱
- 第3次芦屋市地域福祉計画策定委員会委員名簿
- 関係者・事務局名簿
- 地域福祉市民会議報告書（差し替え）
- 検討部会（ワーキングチーム）について
- 第1回検討部会（ワーキングチーム）の参加について
- 芦屋市創生総合戦略概要版

5 審議経過

- (1) 市民意識調査の速報について

(事務局 原田)

地域福祉に関する市民意識調査の結果（速報）について説明
(牧里委員長)

調査結果について、みなさんのご意見やご質問をいただきたいと思います。

福祉の情報を得る方法（問4）としてホームページやメールをあげた人が多いということですが、年齢別にみると50歳代前後で切れ目があり、若い人はITを使わないと見てもらえないけれども高齢の人には遠いという感じですが、そういう実感がありますか。

（橋野委員）

最近の状況として、Facebookをやっているのは50～60歳代の人が多いと聞いています。

ガラケーを使っていてタブレットを薦められる人も多くなっており、インターネットを活用する人が増えています。

（牧里委員長）

調査結果では、60歳以上になるとホームページやメールで情報を得るのは少し厳しいかなと感じますが、市民活動センターに関わっている方は少し進んだ高齢者なのかもしれません。このように、調査結果を見て気づいたことなどが施策や方法を考えるヒントになりますので出してください。

（杉田委員）

私は障がいのある人の団体に所属しています。今まで当事者のための会だと思っていましたが、「当事者団体に相談したい」という回答（問5）を見て、会員のためだけではなく、新たに障がいをもたれた方や家族の方にも役立つときがあると思いました。当事者として強引な意見を出すのに引かかることもありましたが、他の人の役にも立つのだということをもみんなに伝えたいと思います。

（牧里委員長）

活動に参加しやすい条件（問11）の回答は、当然といえば当然ですが、気軽に活動できるチャンスとともに、身近に活動できる場所が多くないということです。アメリカなどではよく持ち寄りホームパーティーをするので、そこで問題がわかり、自然な支援が起こりやすい環境があります。日本は家の中と外がはっきりしていて、集会所には行っても自分の家には入れないという傾向が伝統的にありますが、芦屋市ではどうでしょうか。大きなお屋敷が多く、塀で囲まれているという感じがします。もう少しオープンにする取組ができればいいと思います。日本人はなかなかプライバシーの壁を越えられないので難しいかもしれませんが、私が住んでいる地域では、空き家を人が集まる場にするよう提供すれば固定資産税を10年間無料にしたり、空き家を壊した空地进行を地域のグループで使う畑にしたりして、作物の一部をこども食堂や福祉施設に提供する取組をしています。収穫しても自分だけでは食べきれないので、おすそ分けして、「キュウリでつながる近隣関係」ができないかと考えたりもしています。芦屋市も空き家対策を考えていると思いますが、強制的に壊すだけでなく、もっと積極的に活用しないともったいないです。耐震化などの問題もありますが、事故が起きたときの責任も含めて民間に任せ、住民がお互いに支えあうようにした方がいいと思います。空き家を活用する中で気づいたのは、障がいのある高齢者の行き場がないということです。そうした人や認知症の人たちに来てもらえる場を、

利用者や家族とボランティア、地域の団体が共同運営し、責任を個々の家庭に閉じ込めずに分散するのです。そのようにして、事故が起これば事業者や認定した行政を責めるといふ方向に向き過ぎた構造を、少し戻すことも必要なのではないのでしょうか。そうした場所は、その気になれば作ることができるのではないかと思います。

(柴沼委員)

外国の例のお話は、私も良いことだと思っていますが、日本では地域社会のつながりがよくありません。しかし、防災訓練をすると年代にかかわらず集まってくれて世代間の交流もできますので、活かすべきだと思います。今は年代別に集まっている感じがしますが、年代に関係なく集まることもやっていく必要があると感じています。

(橋野委員)

ある自治会から、集会所が遠く、坂も多かったりするので空き家を借りて居場所をつくりたいと考えたけれども、芦屋ではいざとなると貸してくれないことが多いので難しいという話を聞いたことがあります。

(大永委員)

地域によって違いがあり、山手は坂が多いので集会所を活用した活動が難しいところが多いと思います。中間地域は平坦ですが活動が弱いところが多く、打出地区で成功しているところがありますが、核となる活動が見えにくいです。浜の方は建物が決まっていますので場所を見つけることが難しく、私の地域では閉園した浜風幼稚園の蔵書をいただいたので、高層住宅の集会所を利用して読み聞かせや開架を行う「子どもの図書室」をつくる計画をしていますが、自治会の力量として動けるのはそれぐらいです。

(佐瀬委員)

今の話にもつながりますが、調査結果をみると公的なところへの期待が高いという印象がありますので、空き家活用のつなぎも公的な仕組みをつくれれば、信用して手を挙げてくれる人が出てくる可能性があると思いました。私は個人レベルのことは「やりたい人が3人集まればできる」と言い続けており、やりたいと思ったことを口に出してみると意外にも「空いているからどうぞ」と言ってくれたという体験もあるので、市民の活動にもとても期待したいと思いますが、宝塚市の「きずなの家」の事業のように公民が協働する仕組みを考えてみるのもよいと思います。もうひとつは「男性」がキーワードとして出ています。地域のことがよくわからない、参加しにくい(問14-(9)・(10))という結果が出ていますので、こだわって議論できればよいと思います。また、大人と子ども、高齢者と子どもをどうつなぐかとも考えており、「災害」をキーワードに、プロジェクトで作成されたリーフレットや訓練などをきっかけにしてお祭りにまで発展すればよいと思いますが、普段のつながりとして、歳を取ると一人でご飯を食べることが増えるので、月に1~2回でも一緒に食べられるように子ども食堂とドッキングできるといいねという話もしています。

子ども食堂が「あそこに行く人はお金がない」と言われないように、お手伝いをしてもらって一緒にご飯を食べるなど、子どもたちが行きやすい仕組みをつくらないといけない

と考えています。以前から「子ども110番」は高齢者も含め困った人を助けることにすればよいと言っています。教育委員会の壁が高いのかどの自治体もなかなか動きませんが、もう一度言っておきたいと思います。

(牧里委員長)

いろいろなご意見をありがとうございます。地域で状況が違うので一概に言えないということですが、そういうことも含めてもう少し踏み込んで、どういう可能性や課題があるのかを議論していきたいと思います。まだ意見があるかもしれませんが、次の議題に移ります。市民会議の報告書にも意見が出ていますので、あわせて意見をいただければと思います。

(2) 検討部会の設置について

(地域福祉課 片岡)

地域の福祉を話しあう市民会議報告書について説明

(地域福祉課 頭井)

検討部会（ワーキングチーム）について説明

(牧里委員長)

市民会議の報告書はあらためて見ていただければと思いますが、検討部会をつくってさらに検討を進めようという提案について、ご意見やご質問がありますか。このような形で行うことについて異論はないかと思いますが、市民会議に参加された方から、感想やあらためて言いたいことなどを聞かせてください。

(西村委員)

市民会議で自分が活動している「まごのて」のことを連呼したおかげで、活用されてきています。先月、ひきこもりの方の地域デビューの第一歩になるよう、社会福祉協議会の生活困窮者自立支援事業の担当者の方と来られて協力員と一緒に作業をしましたが、お話もできていい感じです。「まごのて」は6月で丸5年を迎えますが、続いている10人の協力員は話を聴くのが上手で、緊張させない雰囲気を持っていると思います。このように「まごのて」に興味を持っていただき、行動に移していただいたのは、市民会議に参加した成果だと思います。今後も市民の声がどんどん届いて計画に反映されそうなので、続けて参加したいと思っています。

(安宅委員)

私は「まごのて」ができるときに認知症についてお話をさせていただき、毎月第2火曜日に開催されるお茶会のお手伝いをさせていただいています。商店街の中ですので、ひきこもりの方も含めて多くの方が来てくださいます。芦屋に引っ越してきて知り合いがいないときに、たまたま通りかかったら声をかけられてずっとつながっている方などリピーターが多く、多いときには20人ぐらいでおしゃべりされています。通りかかった高校生が参加してくれたり、赤ちゃんを連れてお母さんが休憩されたりすることもあります。

通りに面しているのです。人の目があって、開けっ放しにしても何か起きたこともなく、このようなかたちで自然につながるのはいいなと思っています。

(竹迫委員)

私も「まごのて」に参加してみました。多くの方が来られていて、初めて知りあったのに話が弾んでいました。ベンチプロジェクトで製作した「なかよしベンチ」も置かれていて、みなさんが仲良く座っておられるのを見て嬉しく思いました。これからもどんどん増えていくよう、できることなら、「まごのて」に屋根と壁が有るといいと思います。

(橋野委員)

「あしや玉手箱」でホームページをつくるということですが、市民意識調査でも若い人しか見ないという結果が出ており、誰に向けて発信するのですか。年齢が上の世代の人には違う工夫が必要なのではないかと感じました。また、観光協会が芦屋市の情報を Facebook で発信し始めたと同っていますので、そうしたものと関連など、どのようにすすめるようとしているのでしょうか。

(杉田委員)

私は紙の情報を読むのがしんどくなったのでインターネットで情報を得ていますが、芦屋にはそういう人も多いと思います。若い人も歳を取りますし、先日の熊本地震の状況を見ても、若い人がスマートフォンで得た情報を高齢者に伝えることもできますので、「あしや玉手箱」は良いツールになると思います。また、若い人に発信すれば芦屋市のことにもっと興味をもち、中心的に動いてくれるメンバーを育てることにもなると思います。観光協会の Facebook にはすごく興味がありますので、2つもつくらなくても、リンクなどで良いものにしていただければいいかと思っています。

(地域福祉課 細井)

市民会議ではネットの活用の話が出ていましたが、人の手から手へのつながりを担保するようなものも必要だ、ということも認識されています。第2次芦屋市地域福祉計画に基づくプロジェクトで作成した防災リーフレットは、16,000枚が市内にとどまらず、必要な人の手に届いています。そうした人と人をつなぐツールも含め、検討部会に多くの人に来ていただいて議論できればと思っています。

(杉田委員)

第1回の検討部会には知り合いを誘ってもいいのです。違う視点の人を必ず1人連れてくるぐらいにしないと広がりにくいです。市民会議をもう一度するような時間の無駄にならないようにしたいと思います。

(地域福祉課 細井)

世代を超えていろいろな方に来ていただきたいので、ぜひ知り合いの方などもお誘いあわせのうえ、いらしていただきたいと思っています。手続き上は委員長の指名になりますので、名簿を委員長に確認していただいて、すすめていきたいと思っています。

(牧里委員長)

市民の参加について、従来は地域や当事者の団体の代表の方に出させていただいて、ご意見を計画や施策に反映するという方法がオーソドックスでしたが、自治会に入らない家庭が増えて、PTAの役員もなかなか決まらない時代になり、それだけでは難しくなってきました。そこで、関心がある人を「友達の友達はまた友達だ」というふうにつないで市民のなかに楔を打っていくことで、ある日突然にパカッと割れてみんなが参加しやすい状況ができるのではないかと、という手法が出てきました。雪だるまのように、小さなことから始めて関心がある人を巻き込んでいくことで、いつかは芦屋市民全体に広がるものになるのではないかと思いますので、ぜひお願いしたいと思います。

(寺本委員)

私は「まごのて」の立ち上げに関わりましたが、国から安心生活創造事業の補助金を得て、社会福祉協議会が中心となり、打出商店会や周辺の自治会も協力されて始まりました。所有者の方に協力していただき空きスペースを活用することで、いろいろな人がつながる事業ができていくということは、芦屋でのひとつのモデルになっていると感じます。

(牧里委員長)

空き店舗や空き倉庫を活用した「すきま貢献」ということです。大阪では引き取り手のない放置自転車を活用したレンタル事業が行われていますが、管理はホームレスや生活保護を受給していた人にしてもらい、自転車の1台分の置き場所をいろいろな事業所にお願ひすると、20軒に1つぐらいは興味を持ってもらえます。2人の女子大生が始めた活動ですが、去年はグーグルの募金で5,000万円もらい、テレビに出たりすることで協力する人が増えています。ちょっとしたアイデアも、みんなのものにしていけば関わりたい人は出てきます。みんなの「ちょっと」が大きな取組になることはたくさんありますが、芦屋は潜在能力が高く、火が点けば燃え上がるのではないかと思います。

(佐瀬委員)

私はシルバーボランティア活動の支援と認知症の人を地域で支える活動をしたいと思って、いろいろな地域に関わっています。そのなかで、例えば、相手がないので「囲碁をしたい」という小さな願いが叶わないといった問題に出会います。専門職がそうしたつぶやきを聞いても「しょうがないね」で終わっていますので、地域で暮らしていくなかでの楽しみとして支援するよう、「ひとり一役」のなかで考えていけるとよいと思います。そのなかで、認知症サポーターに登録している人がたくさんおり、活動したくても何をすればよいかわからない人もおられますので、話し相手になったり、デイサービスで囲碁の相手をしたりするボランティアなどが発掘できればよいと期待しています。

(西村委員)

私が地域福祉に目覚めたのは、市の権利擁護支援者養成研修を受けたことがきっかけでした。修了して証書もらったのに1年間何も声がかからず、面白くないと思っていたときに、広報で「まごのて」ができるという記事を見つけて行って見たことが第一歩でした

ので、研修を修了して人材バンクに登録されている方にも、検討部会への参加について、声をかけてもらえるとよいと思いました。

(脇委員)

権利擁護支援者研修は6年目が終わり、修了者は200人ぐらいになり、人材バンクの登録者も60人を超えました。現在は介護相談員として30人ぐらいに動いていただいています。活動の場が少ないことは確かで、どのように地域で活動していただけるかを考えていました。西村委員のご意見はよいことだと思いますので、ぜひやってみたいと思います。

(牧里委員長)

「やってみたい」と心強い返事をいただきました。

(針山委員)

認知症サポーター養成講座を修了された方の活動について、昨年度から市内4か所の地域包括支援センターに認知症地域支援推進員が配置されていますので、今年度は仕掛けをつくるよう話をしています。「あしや玉手箱」と同じ発想で、SNSに登録してもらってゆるやかなネットワークをつくり、支援をしてハッピーな気持ちになったことを感染させる仕掛けなどを考えています。いきなり広げるのは難しいですが、あちこちとつながっていければよいと思います。また、地域発信型ネットワークとのリンクもとても大事だと思っており、私も関わっていますので、自分の課題だと受け止めています。

(安宅委員)

「まごのて」ができる前に、社会福祉協議会の以前の事務所で部屋を借りて「なごみの会」が開かれていました。認知症の参加者が囲碁をしたいと言うと、同じ施設で活動している囲碁の会の人ボランティアで来てくださり、楽しんでおられました。お茶を飲んだりおしゃべりをするので顔馴染みになっていましたので、小さな部屋ですが、このようなかたちでつながるのもいいなと思い出しました。

(牧里委員長)

新潟県が「地域の茶の間」という事業を展開しています。民家を改装したり、店舗や老人福祉センターに併設したりするなどさまざまですが、みんながふらっと来ることができるところで、そこにいない人の悪口は言わない、「あなたは誰」とは聞かないということがルールになっています。私が見学したところは、40人ぐらいの参加者のなかに男性が10人ぐらいいたのに驚きましたが、それはカレーが食べられることがポイントでした。ここに来ればなんとなく落ち着くということであり、オープンで、みんながホッとする場所を求める人が増えているのです。昔は銭湯や井戸端会議があり、それとなく家族を超えてつながる部分がありましたが、都市化や近代化のなかで家族と家族をつなぐものが抜け落ちてひきこもりや虐待、犯罪などもつながっており、ある意味で違う方向に行ってしまったものを取り戻すことが必要になっています。そういう意味で、集える場づくりは、人々が暮らしていくうえであたりまえの、必要最低限のつながりをつくる場所がほしいということであり、些細であってもとても大きなことだと思いますので、ぜひ地域福祉計画でそうい

うところに光を当て、地域の力を引き出して「ちょっとずつ」をつないで、大きなものにしていく取組ができればよいと思います。

(3) 報告事項

(地域福祉課 細井)

芦屋市創生総合戦略（概要版）について説明

(牧里委員長)

説明について感想やご意見、ご質問はありますか。

(地域福祉課 細井)

担当部局ではありませんが、私もワーキングチームの一員ですので現状のことであれば若干のご説明はできるかと思えます。居場所についてはハード整備の担当も含めた11部局がいろいろな角度から議論をしています。そもそも「居場所」や「全世代・多機能」といった言葉やイメージの共有が難しいので、研修から始めるとともに、職員ができるだけ地域に出向いていくという動きをしており、検討部会ともどこかで接点を持てればと思っています。

(杉田委員)

創生総合戦略の冊子のデザインは、とてもカッコいいですね。また、弱視の方にも見やすい配色です。

(企画部総合政策担当 鳥越)

私は4月から創生総合戦略の担当になりましたので、まだ勉強しないといけないのですが、この冊子は他市でお渡ししたときも「芦屋らしい」とお褒めいただいています。

(牧里委員長)

持ち帰ってじっくり読んで、質問などを考えてもらえればと思います。

(4) 今後のスケジュール

(地域福祉課 頭井)

今後のスケジュールについて説明

(牧里委員長)

質問などがありますか。なければ「その他」を説明してください。

(5) その他

(地域福祉課 頭井)

7月23日（土）に開催する保健福祉フェアについて説明

(牧里委員長)

予定した議題は以上ですので、閉会いたします。ご協力ありがとうございました。

以上